

コウトク事件

ヒッポリート・ハーヴェル

(1910年12月)

日本程家長的封建主義から、近代資本家の産業主義へと急速に飛躍した国は他にない。この先例のない変容は、極く僅かな期間のうちに行なわれた。1804年、ロシア船“ナデヤダア”が伝説的なニッポン国と友好関係をもとうとして長崎港に入港した際、その提案した友情は無作法に拒絶された。日本は西欧の野蛮人とは何もしたくなかったのだ。ポルトガルの宣教師達の虐殺以来、ショウグン（将軍）の土地では一群のオランダ商人だけが寛容な処置を受けていた。しかしかような排他性は、19世紀を前にして許されない。ペリー提督はこの国と西欧との通商開始に成功し、“ナデヤダア”が現われてから一世紀もたたないうちに、日本は“文明”の最先端に立った。即ち軍備と軍需品の観点によれば、その陸軍と海軍はロシアのそれに優位を証明したのである。

しかし日本の産業生活の変容は、民衆に幸福をもたらしはしなかった。ここでもまた他の何処にもあるように、資本主義は、人生に最も恐ろしい状態を呼び込んだのである。他の文明国と大体類似した搾取方式が、嘗つては幸福な民衆の天国であったこの土地の息子達と娘達の生命を吸いあげているのだ。

パリイについて大通りだけ知っていて、プロレタリアの街区のあるのは全く知らない現代の世界旅行者は、日本を旅行してもただ美しい体観だけ見て、搾取されている大衆の真の生活には気付くことなく帰ってくる。ラフカディオ・ハーン、ビエル・ロッチェ、ジュディス・ゴーチエ夫人のような芸術心粋者達は、日本のプロレタリアトの不幸には詩のヴェールを引き降ろした。だがひ弱できゃしゃな

女や娘達の哀れな光景，その不幸が重い石炭の荷を定泊中の大型船舶に運ばなければならぬのは，さような作家達の作品に光芒を発している詩的幻想をすぐ払いのけるのだ。

貴族院議員のクワダ博士は，日本の労働者の状態を東京の評論誌—シンコーロン—（新公論）—に書いて，日本における女工達の待遇は，人間性に衝撃を与えるのに充分だと言っている。日本には1万の工場と作業場があり，約100万人の労働者が雇われている。このうち約7千人が女性だ。工場の働き手の年令を制限する法律がないので，女性労働者の大体10%は14才以下である。マッチ工場で雇われている少女達の20%，ガラス工場と煙草工場での10%は10才以下でさえある。多くの工場では，少女達は食事時間も許されず，働きながら食べなければならない。ほとんどすべての木綿糸工場では，昼夜ともにハタを動かす。夜間作業は男子と女子が共に従事し，道徳の低下が認められる。処罰方法もまた非人間的だ。鞭が惜しげなく活用されている。時によると少女達は暗い部屋に閉じこめられ，給食をひきさげて働くことを要求されている。多くの事例では，彼女達の給料は“課料”でなくなり，契約期限の終りには一銭も残らず工場を離れるのだ。男子労働者の状態も同じく非人間的である。鉦夫については筆舌に尽くせない。

さような社会状態が日本の有能な男女の良心を眼覚めさせたのは当然である。彼等はこの経済的悪事に抗議の声をあげた。社会主義とアナーキズムに表明される熱烈な近代的革命思想に依って，彼等は現在，被抑圧，被搾取大衆にインターナショナルな友愛の宣伝を拵げている。先の戦争（訳註・日露戦争）ではロシアの捕虜の間に革命文書の配布を許した政府自体が，今では自国での革命精神の台頭に直面せざるを得なくなったのだ。

多くの国に於けると同じく、日本でも社会主義思想の幾つかの傾向がある。優れたカタヤマ氏（訳註・片山潜）に代表されるマルキスト達、アナキスト即ち「連合社会主義」とも言われる人びと、その優れた代表がデンジロ・コウトクである。この運動は全体として当然の事だが、未だ非常に微力である。ロシアとの戦争がその成長にとって適切な養分を急速に与えたが、それはまた運動に、政府の迫害をもたらした。

反動は現在の首相、カツラ男爵（訳註・桂太郎）の治世下で強力に発現した。軍国主義プロシアの貴族精神の中で成長したこの男は、急進分子の対策に最も厳格な方法を活用している。その迫害はデンジロ・コウトク、彼の妻、及び24名の同志を「皇族に対し反逆を計画した」として逮捕し確認したことで頂点に達した。

カタヤマ氏が国際社会主義者協会で、迫害を受ける日本の急進主義者達のためにした最近の訴えが多くの効果をもたらしたとは思えない。カツラ内閣は、獲物を離さず、コウトクと彼の同志達を殺害しようとしているが、それによって不平分子の運動を根絶しよう并希望するのだ。文明世界の自由を愛好する人びとに対し、日本の支配階級はコウトクとその友人達に体现される現代思想を殺そうとする試みによって、それが成功するかどうかを提起しているのだ。

デンジロ・コウトクは非常に才能のある人で、日本では社会主義者、アナキスト、反軍国主義の思想を大衆化した。彼はカール・マルクス、レオ・トルストイ、ピーター・クロボトキンの多くの著作を翻訳し、長年に亘って、これらのラジカルな思想家達の教義の宣伝に努めてきた。そのために彼は何度も投獄され、健康を失うに至ったのだ。しかし投獄は彼を殺しはしなかった。そこで政府はこれ程の才能のある男を恐れ、今度こそその仕事にとりかかろうと決意したのである。

日露戦争以前のコウトクは、有力なトウキョウの日刊紙ヨロズチヨウホウ（萬

朝報)の優れた編集者のひとりだった。彼は反軍国主義の信念、戦争について自己の感情を恐れげなく表明したため、その地位を去らねばならなかった。彼はラジカルな月刊誌、タツクワを創刊した。この雑誌は革命思想を擁護したので当局によって圧迫された。他のラジカルな雑誌も同じ運命になったがその中にヘイミンシンブン、クマモトヒョウロン、シンシホウ、ニッポンヘイミンがある。ニッポンヘイミン誌には、1905年、アムステルダムにおける国際アナーキスト会議での決議が発表された。

コウトクは労働者問題に限らない。ホーチン夫人、同志リエン・スン・ソーと共働して東京大学に於いて、アナーキズム思想を日本及び中国の学生に講義した。中国人の間での宣伝はチェン・イー誌、中国アナーキストニュース誌の欄によって行なわれた。

11月10日、連合通信社(A・P)によって次の電報がニューヨークに到着した。

「天皇の生命に対する計画者達を吟味するのに組織された特別法廷は本日発表した。首謀者コウトクとコウトクの妻、女性一名を含む26名は有罪。法廷は「73条に基づく厳罰を勧告」これは皇族に対する計画者達の死刑を規定している。」

ロイター通信を経由して同じニュースが英国に到着した。この情報は最初、トキーウ日刊紙、ホーチンブンによって発表された。ニュースは、発表されてもその確度を試す方法がなかった。大日本帝国ではどの新聞もさよふな報導を当局の許可なしには発行し得ないのだ。実に強力な検閲が事前にニュースの発行を

そ止している。だからホーチシンプンがこれを印刷した時、この新聞はその内容の全責任を負うと言ったのである。

ニュースがニューヨークに到着すると、直ちに抗議運動が開始された。日本政府の代表者達と会見したが、これらの代表者達は電報情報の真実性を否定しなかった。しかし問題については外交的沈黙を守った。現在、抗議は全国的様相を呈している。即ち数百通の抗議文と電報がワシントン在の日本大使館とニューヨークの領事に宛て送られ、K・ミズノ氏は、ある社会的に著名な人の問い合せに対し次の返書を送った。

「同封の文書に関連して、私は貴下に極東通信社、当市、ナッソー通り35、のM・ホンダ氏を紹介します。この人は私よりこの問題について詳しいのです。しかし私がこの地方のアナーキスト達に、コウトクとその盟友に対しては特別法廷が死刑を宣したと報道したというのは正しくありません。この点、ホンダ氏は貴方に法廷の構成に就いて、憲法と法文の引用を示すでしょう。日本の裁判所は政治の影響、世論とか無責任な民衆の煽動のような外部からの圧迫を認めない程独立しています。」

ミズノ氏は正確ではない。地方のアナーキスト達ではなく、言論自由同盟並びにフランシスコ・フェラー協会の会長アボット氏とフェラー協会書記ベイヤード・ボイセン教授の二人がミズノ氏を訪問したのだ。

アメリカ人の抗議はミカドの召使に気にいらなかったのは明白だ。また彼が訪問者達にこの抗議から手を引かそうと努力した理由を説明するのもむづかしい。

極東通信の局長、モトサダ・ツモト氏もこの文案者との会見にあたって、波立つ水に油を注ぐのだった。この人は突然姿を消し、彼に代って、M・ホンダ氏が

上記の手紙に対し、次の返事を寄せた。

「拜啓、ツモト氏が日本へ帰って不在のため、私が彼宛ての手紙を被見しましたことをお許し下さい。確かなことはわれわれはこの問題について、貴下に申し上げる程の正確な事実をもっていないことです。しかしながら貴下が手紙で申されているのは、事情を過大視し、日本を誤り伝えておられるように思います。われわれが申しあげられるのは、日本は法治国であり、行なわれたことが何であっても、わが国の憲法と条文に従って行なわれるでしょうし、これは思うに人間的で正しいと考えるものであります。

M・ホンダ」

追伸

1. コウトクはヨロズ紙の主幹ではなく、編集員のひとりであった。
2. 特別法廷の組織は、20年以上も前に発布された憲法第59条に規定されている。
3. われわれ日本人によるとコウトクに対し、“知識人”の名称は与えません。帝国大学とワセダ大学で数名の教授が社会主義の教義を支持し、宣伝しているが、その人びとは当局によって黙許され、民衆に尊敬されている。コウトクの党は、わが国の社会秩序と道徳の破壊者であり、従って野党新聞ですら彼とその追隨者達には同情をもっていない。それどころか、民衆は一般に彼等を嫌っている—それ故彼等は相等な職業をもつのが困難なのである。もしあなた方、外部者がこれらの徒輩を煽動し、援助するなら、それは日本の民衆をして貴国との真の友情を疑はすに至るでしょう。

ホンダ氏はわれわれに“正確な事実をもっていない”と確言した。ではどうし

て彼はこの事件についてのわれわれの文書が“過大視し日本を誤伝”すると知ったのであろうか？

領事は姿を消したツモト氏と同じく、われわれに、彼等の国における厳格な検閲によってこの事件の囚人達について議論するのを困難にしていると言う。だとすれば日本人は迫害について全くの無知に付されているのだ。

われわれは日本の検閲の意味をよく知っている。その大きな利益に不慣れな人は、日露戦争中に実施されたスパイ制度を想起するだろう。確かに外国通信員は、日本の政治家達のリベラリズムに慣れるいい機会を持ったのだ。

カタヤマ氏が国際社会主義者協会で抗議し、西欧のラジカルな新聞に、日本に於ける社会主義者に対する野蛮な迫害を非難した際、ホンダ氏が自国を助けなかったのは奇妙である。この人は日本人であるカタヤマ氏もまた自国を誤り伝えていると非難するのではないだろうか？

当然ながら誤説の意図は、日本を代表する公務員達の側にある。運動に不信を起こさせ、同時にコウトクの性質を黒く塗りつぶす意図で、刑の宣告に対する憤激の成長を排他的にアナーキスト的だときめつけるよう表明されているのだ。勿論、この狂気には対策法がある。しかしわれわれはわれわれの友人達を救出するのにアメリカの資本家達の同情をひこうとは思わない。問題外である。

実際、ホンダ氏とその同僚は、社会主義が帝国大学とワセダ大学で教えられていると確言した。しかし彼等は学生に教えられる社会主義の種類を指摘するのを忘れている。それはマルクス・エンゲルスの国際的革命社会主義ではなく、マロック、レロイ・ポーロウ、ウエスリー・ヒルのような人びとの支持する社会主義、淡く染めた保守的国家社会主義である。

日本の支配階級がデンジロ・コウトクに同情しないのは容易に理解できる。それはそれなりの理由があるのだ—同じことはフランスのブルジョワジーがエルヴェを監獄にぶちこみ、ドイツ人はベーベルを信用せず、われわれの支配権力がデ

ビスやウオーレンを嫌うのと似ている。ホンダ氏の手紙に関連してまことに興味深いのは、日本人が一般にコウトクとその同志達を嫌って居り、"それ故彼等は相当な職業をもつのが困難である"ことだ。ホンダ氏はヨロズ紙の編集員の仕事を指しているのだろうか？たゞ主幹の能力はないにしてもだ。それとも社会主義の書物の翻訳は相当なのではないと言うのだろうか？

可愛想なコウトク、彼はガリソン、トルストイ、マツチニーの徒に組入れられ、いやイエスや仏陀に組入れられることで満足しなければならない。これらの人びとも相当な仕事を持たず、支配階級は当時、彼等を嫌っていたのだ。

死刑が勧告されたとか宣告されたとかの技術的問題をぐずぐず言うには、人生は余りにも貴重である。事實は、コウトクとその友人達が生命の直接的危険にさらされているのだ。強力な抗議を求めるにはわれわれが正義と国際的人間連帯の名において、呼びかけるだけで十分である。ドレフェースとフェラーはわれわれに警告するに違いない。

* * *

本誌の印刷に行こうとしていて日刊紙で次の電報を読んだ。

トーキョウ、10月8日—著名な日本の弁護士ホマイ、ウザワの両氏はもし彼等が最近、ミカドと皇族暗殺の反逆罪で逮捕された26名の日本の急進主義者を弁護するなら、処刑を本日執行すると脅迫された。

政府はこの26名がアナキストであり、殺すべきであり、何らの弁護に値いしないとの立場をとっている。

これらの人びとの裁判は間もなく始まるが、裁判の当日が近づくにつれて、世論は高まっている。

日本における正義

ヒッポリート・ハーヴェル

(1911年1月号)

日本の同志達の運命は未だに不安定な状態である。トウキョウの最高裁判所は事件を審議し、まもなく決定するだろう。われわれの友人達は、反動の犠牲者になるのだろうか？彼等はいけにえの死に遭遇するのだろうか？

もしわれわれがすでに国際的な性格を形どっているこの抗議運動を、精力的に継続するならば、それは起きないだろう。最初、日本政府はこの抗議運動を無視しようと考えた。それがどれ程の規模に成長するのか想像できなかったのである。国際的連帯への訴えは強力な共鳴を得た。すべての国々の革命家達は、トウキョウで裁決されているのは自分達の運動であり、デンジロ・コウトクと同志達の運命の宣告は、現代思想への直接的挑戦であると本能的に感じている。

日本政府は国際的抗議を考慮するだろうか。だがとうとう沈黙を破り公式見解を出して米国とヨーロッパの主要な新聞に発表せざるを得なくなったのだ。ミカドの政府は、死刑囚をコミューニストアナーキストと規定することでカードを切ったのだ。だがそれはただ野蛮で野じゅう的、いや更に愚かしさを証明するのに成功しただけであった。われわれは宣告された同志達に関し、逆の見方をしようとはしなかった。事実、われわれの最初の訴えは明白に、デンジロ・コウトクはアナーキスト、日本で“クロボトキン主義者達”の間では指導者として知名であると明言した。現代の社会思想に親炙した知識人なら誰でもクロボトキンが君主主義者でない事は知っている。われわれは、同志の中にコウトクのような作家、オオイソ博士のような医者、タケダのような芸術家、スガノ・カンノ嬢のような翻訳家がいるのを誇りとする。26名の死刑囚は、日本の知的分子を代表す

るものであり、彼等の中には、労働者、農民、技術者、医者、それに3名の仏教徒がいるのだ。

日本政府の声明は全く一面的である。意図的にアナーキストだけを指摘しているが、昨年の6月以来、日本では200名以上の社会主義者達が刑務所に呻吟している。フランス社会主義者の日刊紙「ウマニティ」は、日本の指導的社会主義者S・カタヤマからジャン・ロンゲーが受取った手紙を発表し、その中でカタヤマは現在日本の社会主義者達が付されている恐るべき迫害と抑圧の連続を語っているのだ。カタヤマはロンゲーに対し、日本社会主義者達の受けている粗野な処置に反対の声をあげ、その恐るべき闘争において自分達を支援するよう懇願している。そしてカタヤマは全世界にそれが公知されるよう求めている。

かような事実を前にして、日本政府のスポークスマンである極東情報局のマスジロ・ホンダ、ツネゴ・ババ両氏は極東経済誌(第1巻3号)で「日本において政治迫害は不可能である」と言う。しかし、他の著名な日本人はホンダ、ババ両氏に全く同意しない。前外務大臣、ハヤシ伯爵は社会主義について、タイヨウ誌に一群の強力な論文を寄稿した7人の学者、政治評論家のひとりである。ハヤシ伯爵は社会主義者の出版物を抑圧する意図をもった文部大臣の政策は、心が狭く、危険で、所期の目的を得るには不十分だと言っている。他の6人の寄稿家達は日本の社会主義者達の「アナーキスト的傾向」を非難しながらも、政府が急進主義者や不平分子を秘密な煽動へと実際に追いやる何らかの手段をとらないようにと警告している。寄稿者の一人、イヌカイ氏は一反对党の首領だが一日本における社会主義運動の現在の危険な傾向は政府に責任があるとしている。警察当局は、すべての社会主義者に厳しいスパイをつけ、彼の友人や親族は社会主義に同情している者だと警察に疑われない為には彼を締め出さざるを得なかったと言っている。

日本の公式見解は、コウトクとその仲間に対する手続きの合法性を特に強調し

ている。われわれは言いたてられている合法性に関して公平な観察者の言うところを聞いてみよう。

ロバート・ヤング氏はジャパクロニクル紙（日本で発行されている資本家の刊行物）の編集者であるが、彼がロンドンデイリーニュースの代表との会見に答えたものが、12月9日付の新聞に次のようにでている。

「貴紙の読者は日本に於ける予審法廷に理解を持つべきです。この審理は通常、秘密に行なわれるが、事件についての決定は事実上の評決（実際には調査結果）となり、判決にはならないのです。その次に公開裁判となり、この公開裁判の後で、更に高級法廷へ訴えることができ、その上この法廷の決定は控訴院へ控訴でき、そこで の決裁は変更できない。

ところでこれら26名の社会主義者達の事件は、予審法廷で審議されただけで彼等の権利である3つの公開裁判を受ける代りに、事件は直ちに控訴院へ送られたこと——この法廷は明日開廷される——しかもその決裁からは控訴できないこととははっきり知っておかねばなりません。

私はこの新方針がこの国のどの法律からでているのか知りませんが、憲法や前例にないことだけは確かです。それだけにとどまらないのだ。私は控訴院が26名の男女を非公開審理で吟味し、そのため彼等は公開裁判が持てず、控訴の機会がなく、われわれは決して事実を知ることがないと思うのです。これらの人びとは逮捕されて以来、事件を公衆に知らせる機会がなかったのです。

他方、彼等が逮捕されると日本のすべての新聞——私の新聞も含まれています——には、逮捕または逮捕に関連して、何事によらず示唆してはならないとの指示が出されたのである。だがこれは日本警察当局が、日本の諸新聞社とその後間もなく会見し、当局が逮捕者達に重大な罪課を付す——それでも皇族に対する計画があったとは指摘しなかったのですが——ことはできたのです。」

ホンダ・ババ両氏は自国政府の行動を正当化しようとしただけではなかった。彼等は有罪者の性格を黒く塗りつぶすことで事件を強化しようとしたのである。最近までホンダ氏はニューヨークの急進分子の間ではリバタリアンの仮面を被っていた。ところが今になって彼は本当の色合いで自分を現わしたのである。そして彼の同僚ババ氏はボストンのトランスクリプト紙上にアリス・ストーン・ブラックウエル嬢の抗議に答えることで正しく非難されている。彼は犯罪人は「財産について共産主義の教義を自分達の友人に及ぼしたというので、全ての同情が全く失われている。女性社会主義者（スガノ・カンノ嬢）の行動は特に日本女性对社会主義について話すのに顔を赫らめないではいられないほどのものだ」と言うのである。

ババ氏は自分に嘘つきで誹毀者の焼印を押したければもっと確実な方法を選ぶべきだった。死の闘に立つ高貴な女性にさような悪口が投げつけられるのは最も卑しい悪党だけである。ペロフスカヤとかスピリドノヴァのような女を悪口するのは、文明国で男と考えられるだろうか。

かような悪口に答えるには、われわれは、コウトク、ドクター・オオイシ、スガノカンノ嬢——これらの人びとは通信があった——等が高貴で美しい性格をもった人びとだと断言できる。この意見は、われわれだけのものではない。パサデナ在住のL・フレッシュマン氏は日露戦争中は、従軍記者であったが、ロサンゼルスでの抗議集会に関連して、コウトクを訪ね、日本の同志達の家庭で歓迎された。彼はコウトクのことを日本の代表的詩作家でその文学上のスタイルでは他の諸国の最良の作家達に比肩し、婦人のように控え目でおとなしいと記している。

わが最愛の同志ピーター・クロボトキンの娘、サーシャ・クロボトキン・レベデフはわれわれに手紙を書いて送ってきた。

「わたしの父は、コウトクが送ってきた手紙から判断して、コウトクは暴力活動の人というよりはるかに教師のような人だと言ったものでした。彼は明白に高

い教育を受けた深い思想家です。わたし自身、父の本「田園、工場、作業場」の翻訳のことで幾度か通信しました。彼は特におとなしく、礼儀正しい人で、日本の農民の絶望的な状況をよく書いていました。「土地もなく、食物もなく——ただ幾粒かの米だけ」というのが彼の言葉でした。」

更に日本政府が郵便物を不正に入手するのが証明されたとはどんなに絶望的であることか、これは個人の親書の尊厳に関連して万国郵便規約を破り有罪である。

日本で疑わしき人物宛に米国やヨーロッパから送られた手紙は、政府が押収し、その内容が検査される。政府は有罪者に関し真実を抑圧するのにあらゆる手段を駆使するのだ。

われわれは自由の友人達が、計られた犠牲者達のために努力をやめないよう希望する。日本政府がこの卑劣な計画に成功すれば、社会的経済的解放闘争は深刻な打撃を受けよう。われわれはコウトクとその友人達を救わなければならない。